

1. 背景とねらい

岩手県における小麦の収量水準は依然200-300kg台の低水準に留まっている。小麦は生育期間が長いので地力に左右されやすく、地力に見合った品種の選定および施肥対応が必要とされる。そこで5ヶ年間にわたり、県南地域の代表的な土壌型である沖積土（県南分場）、黄色重粘土（江刺市柏原）、礫質酸性黒ボク土（和賀町後藤野）の転換畑において、各種小麦品種を用いた施肥試験を行った結果、土壌型及び品種による施肥対応技術が明らかになったので指導参考事項に供したい。なお本技術での播種は全てドリル又は全面全層播である。

2. 技術の内容

土壌型	改善要因	施肥対策（○重点項目）
礫質黒ボク土	穂数、全重不足 中後期茎数減 一穂粒数不足 千粒重不足	○既肥、土改材、○年内追肥(N2-3kg) 年内追肥、○融雪期追肥(N4kg)、減分期追肥 ○減分期追肥(N2kg) ○出穂期追肥(N2kg)
黄色土	穂数、全重不足 初期茎数不足 中後期茎数減 千粒重増大	○既肥、土改材、基肥増、（年内追肥） 基肥増、（年内追肥） ○融雪期追肥(N4kg)、○減分期追肥 ○出穂期追肥(N2kg)
沖積土	一穂粒数増大 倒伏（ナンブ） 生育量増大（ハチマン） 高蛋白化（ハチマン）	○減分期追肥(N2kg) 基肥標準(N4-5kg)、○融雪期追肥減(N2kg) ○基肥増(N8kg)、融雪期(N4kg)、減分期(N2kg) 出穂期追肥(N2kg)

3. 指導上の留意点

- (1)地力の低い土壌ほど基肥、追肥等の施肥効果、及び既肥、土改材等の土壌改良効果は大きくなる。逆に地力の高い土壌ではこれらの効果は低く、むしろ耐肥性や倒伏程度に差のある品種の効果の方が高い。
- (2)年内追肥は表面散布のため、北海道や長野県で確認されている様に単純な基肥増よりも効果が高い。但し遅れると雪腐病の危険があるので早め実施する。
- (3)長期連作による立枯病多発圃場では施肥効果が乱される。特に尿素追肥は立枯病を助長しやすい。尿素に替わる肥料として現在塩安を検討中である。

4. 参考資料

小野剛志他4名 岩手農試研報 岩手県南部の転換畑における土壌型別小麦の施肥法について 1987.4.

5. 試験成績

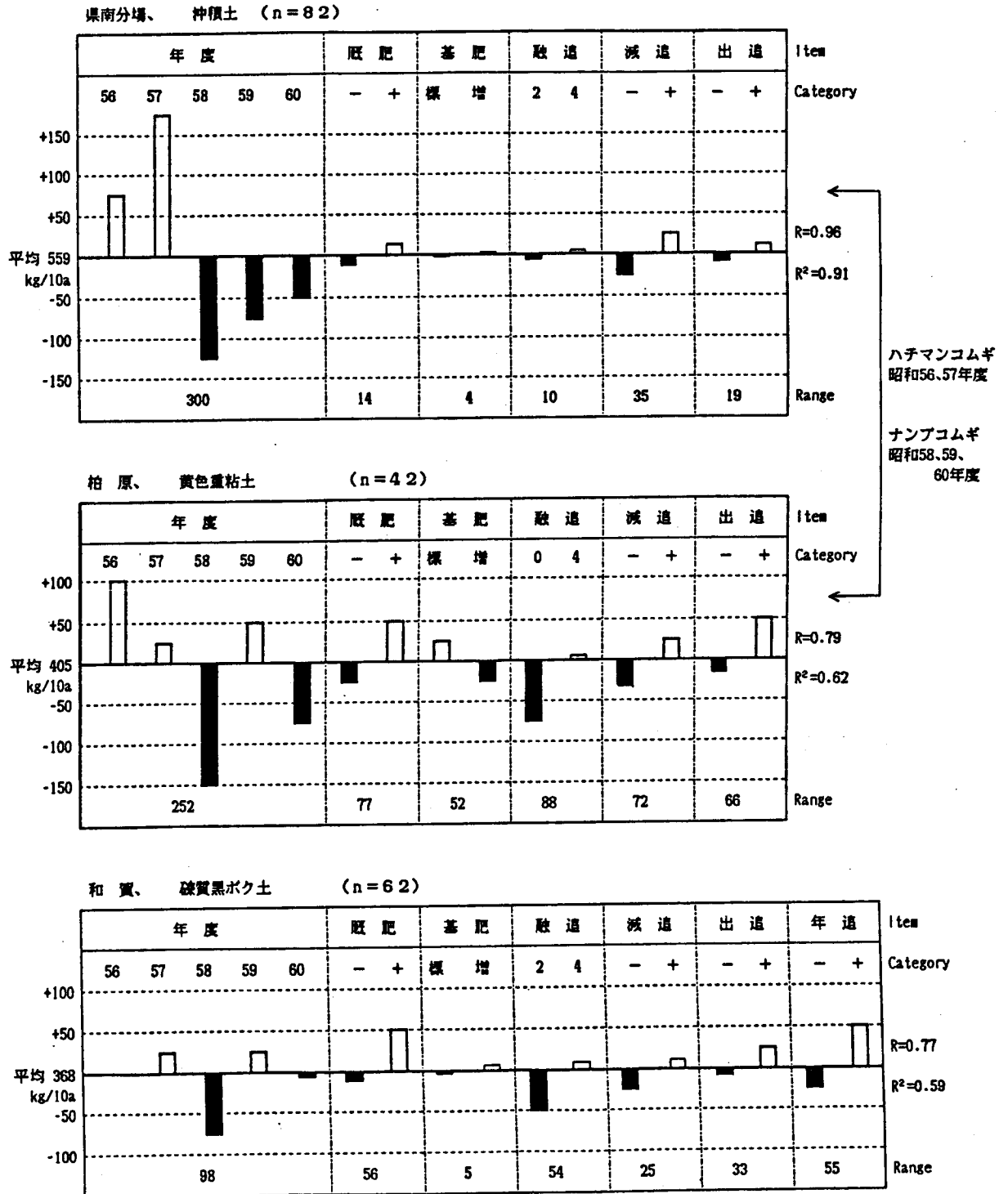


図 地域別小麦収量に対する年次および処理効果  
 (数量化1類での標準化カテゴリーウエイト)  
 融追=融雪期追肥、 減追=減分期追肥、 出追=出穂期追肥、 年追=年内追肥